

Y8-48

院長お出かけの「地域懇談会」からの発展～救急認定看護師の講義につないで～

松江赤十字病院 看護科

○脇田 和子、江角眞由美、齊籐 文章、中筋 真紀

当院は、松江市（高齢化率25%）に位置する。二次医療圏で唯一、三次救急までを担当し、救命救急センターを有する地域の急性期基幹病院である。病院の機能分化を叫ばれるなか、院長が「地域懇談会」と称し、医療や当院の現状と問題点を地域へ向け、講義することを昨年から開始した。院長講義が終了した地域住民より、「急性期病院の役割は理解したが、救急車を呼ぶポイントを具体的に教えて欲しい」という要望があった。『いざという時に備えよう～救急車を呼ぶ時のポイント～』をテーマとし、救急看護認定看護師がその要望に応え、講義を受け持ったので報告する。終了後のアンケート結果より、参加者の64%の人が「テーマについて関心があった」とした。講義内容について、96%が「よくわかった」、95%の人が「大変役立ちそうだ」という結果であった。また、地域住民への講義で、71%の人が「日赤に親近感を大変感じた」とした。さらに、「救急現場からの話で、臨場感があって良かった」「自分たちは不安がいっぱい。中核病院として意識された」「救急車を依頼する時は近くの日赤病院でお願い。対応よろしく」「このような機会を持ってもらうと身近な病院として親しみを感ずる。もっと地域に出かけて欲しい」など、住民からの反応を得ることができた。敷居が高いとされた急性期中核病院から、地域へ向かって講義することは、講義内容の伝達のみならず、地域とのコミュニケーションの場となり、有益であることがわかった。地域での活動は、直接のface to faceの関係性の構築に繋がることを確認した。さらに、患者や住民と向き合って、そのニーズ把握に心掛け、活動に生かすか事が必要であると考えられる。

Y8-50

輸血用血液製剤の適切な供給体制確立に向けた取り組み

東京都赤十字血液センター

○神田 耕平、木暮 秀哉、高橋 好春、松崎 政治、松崎 浩史、中島 一格

【はじめに】東京都内では輸血用血液製剤の供給増加に比例し、緊急要請件数も年々増加傾向を示し、平成17年度には1万3千件を超えた（1ヶ月あたり1千件以上）。一方、配送人員および車両台数には限りがあるため、緊急発注が一時に集中するような場面では、医療機関への到着時間の大幅な遅延などが発生する危険性が考えられた。このリスクを可能な限り軽減するため、平成19年より（公財）献血供給事業団と合同で作業部会を立ち上げ、輸血用血液製剤の適切な供給体制確立に向けた取り組みを行ったので報告する。

【方法】1.受注マニュアルに緊急要請時の電話対応として、緊急の程度を尋ねる手順を追加し、緊急要請に代わる適切な供給方法を提示した。2.緊急要請件数が著しく高い、または増加傾向にある医療機関に対しては、訪問して事情の内容を伺い、その医療機関に特化した分析データ等を元に適切な発注についての方策を提案した。

【結果】1.医療機関と血液センターとの意見交換の場が生じ、相互の実情を理解した上での議論ができる環境が構築された。2.総供給単位数が増加傾向を示す一方、緊急要請件数は平成23年度には約8千件にまで低減し、緊急要請時の配送遅延リスクが軽減された。

【考察】受注時の対応および継続的な訪問活動によって医療機関側の緊急要請の適正化に対する意識が変化したと考えられる。

【結語】この取り組みは単に緊急要請の件数を減らすことだけが目的ではなく、適切な供給体制を確立することにより、配送人員確保・車両確保を図り、血液製剤を待っている患者様に迅速にお届けすることが最大の目的であることを念頭において今後も活動を継続する。

Y8-49

赤十字の理解と推進者の育成ー参加者の感想からみた三施設合同研修会の意義ー

伊勢赤十字病院 研修センター¹⁾、

日本赤十字社三重県支部²⁾、

三重県赤十字血液センター³⁾

○石谷 操¹⁾、服部 和人¹⁾、出口 哲也¹⁾、神田 裕司²⁾、吉田 信一³⁾

三重県支部、伊勢赤十字病院、三重県赤十字血液センターでは、平成19年度より2日間の三施設合同研修会（以下、研修会）を開催している。研修会は、赤十字の理解を深め、赤十字活動の推進者となってもらうことを期待し、原則として5年目以上の職員を対象に実施している。今回、研修会の今後の企画等を見直すことを目的に、平成23年度参加者25名の研修会の感想を分析し、本研修会の意義を考察した。今年度は研修内容の一つとして、災害救護、国際救援、青少年赤十字、救急法、血液事業等身近な方をシンポジウムとしてシンポジウムを企画した。シンポジウムを通してそれぞれ職種や業務内容は異なっているが「苦しんでいる人を助けたい」という思いで働いていることを共有できた。また、同じ赤十字で働く職員として同じ理念のもとで、それぞれの役割を担っていることを認識し、赤十字の組織・職員の偉大さ・誇りを感じるとともに、自分も赤十字の組織の一員であることに喜び・誇りをもつことができていた。さらに、後輩への赤十字の価値の伝承についても今の役割の中でどう実践していくかに発展していた。研修会は、1. 同じ赤十字という組織の価値観を共有し、2. 赤十字の職員であることを意識化し、3. 各々が赤十字職員としての仕事の価値に気づく機会となっている。赤十字の職員としての意識が、仕事でのちょっとした心遣い、行動へとつながり、自身の仕事のモチベーションにも影響する。また、三施設はそれぞれの仕事内容は異なるが、互いの理解を深めることによって連携の強化が期待できる。職員一人ひとりが赤十字の理解者・推進者であり、小さな取り組みの積み重ねが組織の大きな成果につながるかと考える。

Y9-27

フローラン持続静注療法を受ける重症心不全患者の自己管理に向けての関わり

長野赤十字病院 循環器病センター

○山岸知恵美、秋山 由佳、中島 照己、鈴木 良美、宮澤 泉、平田 尚人

【はじめに】近年、手術手技の向上と薬物管理の進歩により、先天性心疾患患者の生命予後が飛躍的に向上している。その反面、病態が重症化し難治性となるケースもある。今回、アイゼンメンジャー症候群を発症した40代男性患者に対して、肺動脈圧の低下を目的にプロスタサイクリン持続静注の導入を行った。治療の導入時は、投与量の増加に伴い急激な血圧の低下があるため、集中的な観察が必要となる。しかし、患者の治療環境によるストレスや在宅への移行が目的であることを考慮し、一般病棟での導入となった。治療を進めながら、家族と過ごす時間を持てるよう配慮し、在宅療養への意欲を引き出した。また、早期から多職種が連携して自己管理へのアプローチを行い在宅療養への準備を進めたことは、患者の闘病意欲とQOLの向上につながった。その症例を提示し、また、関わりの中で得られた問題点などを含め報告する。

【症例提示】40代男性。平成5年より先天性心房中隔欠損症から移行したアイゼンメンジャー症候群と診断され加療。妻と3人の子供の5人家族。当科外来に通院し、薬物療法と在宅酸素療法を行いながら在宅療養していた。療養中は、増悪と緩解を繰り返しながらも電機メーカーの配達担当に従事していた。平成24年4月2日、安静時の呼吸困難増強と全身の浮腫が著明となり入院。最大の薬物治療でも治療困難な状態であり、フローラン持続静注療法を導入することとなった。当院におけるこの治療方法は2例目であり、また、在宅に移行する初の症例であった。